

Anatole France に於ける快樂と苦悩

——《Poison》の意識と意識世界の溝——

小 住 毅 志

I

Anatole France は、作品 *Jardins d'Epicure* の中で、人間を、昆虫の姿に似せて創ったであろうことを述べている。昆虫は蛹の生活を終えると蝶の形に変じ、その生命の究極に於ては、愛すること、美しくあること、だけしか考えていないように見受けられるからである。生の彼岸が死であるとしても、生の究極は愛と美であるとする快樂主義者としての一面を示している。愛と美は、生の快感に支えられて、人生に於ける価値となり、このことが作品 *Balthazar* に於けるような、人生は愛するためにあるのか、それとも、理解するためにあるのか、という岐きに結び付いている。

彼にとって、確かに、《Savoir, c'est pouvoir》であるが、彼は人生の他の面をも見つめていた。これは、認識と求道という文学者としての姿勢の問題であると同時に、彼の文学者としての意識構造の問題でもある。彼は *Mme de Caillavet* に送った本の献辞として《Connaître pour aimer》と記しているが、認識の手段性、求道に於ける愛の究極性を示している。

Anatole France の場合、人生は単に認識の客体であるのみならず、求道と不可分でもあった。その究極が愛と美であるとしても、そこにあるのは安易なエロティスムや夢想ではない。切実な生身の人間の体臭が染み付いているからである。

彼自身この体臭を担いながら、これに対して客観的な自意識を持つことが出来た。この自意識が作品の中に種々の位相で以って投影される訳だが、このことは、作品 *Thaïs* の成立過程からも窺われる。

彼は、何故に、単なるエジプト伝説と *Lebiez* と *Barrés* の幻想的物語等¹⁾とで以って、作品 *Thaïs* を創り上げたのか。作者の究極とする愛と美が激しい内面の葛藤を前提としていることを示すためである。

I

作品 *Désirs de Jean Servien* の中で、*Tudesco* は次のように述べている。

1) *Lebiez* と *Barrés* は老婆を強盗殺害し、処刑の直前自分の心の浅ましさを反省し、二人の心は宗教的に清められていくという当時の小説。

他に、10世紀のドイツの *Hroswitha* の仏訳本から啓示を受けたとする説もある。

—…II y a deux génies qui soufflent tour à tour leurs inspirations irrésistibles à l'oreille des humains: l'Amour et l'Ambition.²⁾

快樂状態に志向する人間を動かしているものは、愛と野心である。価値追求には欲望が付き纏い、欲望が人生の中で不調和をもたらすと、快樂に苦悩の影を落す。

Anatole France 自身、《J'aime, donc je suis. Je n'aime plus, je ne suis plus rien.》³⁾と述べているように、愛は人間の実在を証明し、性を現実的道具として種々の快樂と苦悩を生む。

従って、彼の文学に於ける快樂と苦悩は、彼にとっての人間の存在理由としての愛の特質に裏打ちされていることになる。

愛は、必ずしも、青春時代だけの特権ではない。青春時代は欲望と快樂に満ち、人間はこの状態をいつまでも引き伸ばそうとする。

そこには、当然、多様性が生じてくる。恋愛、隣人愛、人類愛…。Paphnuceの愛、Sylvestre Bonnardの愛、Fédération européenneの愛…。

Anatole Franceは、愛を次のように定義している。

《C'est une grande absurdité que de confondre l'amour avec la jeunesse. La jeunesse est ivre d'elle-même. Toute la terre lui est comme un miroir. L'amour est une science. Il y a beaucoup d'érudition, beaucoup d'application》⁴⁾

彼の愛は快樂に支えられながらも、苦悩のフィルターをかけられたものであり、これをより切実な恋愛の観点から解明しておく必要がある。

Anatole France は、Mme de Caillavet, Nina de Caillias 等と多くの恋愛体験を持っている。殊に、Mme de Caillavetとは、初期には、彼女のサロンの《Maitre. spirituel》であったのが、自分の家庭の不仲も手伝い、長期間の公然たる関係に陥り、多くの名作を生み出す契機となっている。

唯、恋愛には、動物性——官能性——知性——人間性の意識過程があり、この過程の中にも Anatole France の特質がある筈である。決定論と本能に従う動物性の次元を、高次の人間性の次元に結び付ける過程に於て、彼は《Plus nous sommes voluptueux, et plus nous sommes intelligents.》⁵⁾と述べている。このことは、彼の恋愛に於ける肉体と精神の総和性を示すと同時に、彼の知性に於ける官能の意義の大きさを証明している。知性は官能の力を借りて豊かなイメージを伴うが、人間の欲望の問題とも結び付いている。Jean Levaillant もこの点を指摘して次のように述べている。

2) Anatole France : Désirs de Jean Servien (Oeuvres complètes illustrées d'Anatole France Tome I', Calmann-Lévy, P. 164

3) Jean-Jacques Brousseau: Anatole France en pantoufles,, P. 78

4) I bid., P. 137

5) I bid., P. 78

《On n'a voulu voir dans son oeuvre qu'un épicurisme facile, une morale de la volupté, en oubliant que pour lui la volupté n'est pas une jouissance, mais un désir, le Désir, qui entraîne le monde dans les métamorphoses de l'inquiétude et de la contradiction.》⁶⁾

即ち、彼の快楽主義の背後には、欲望が蠢いており、人生に対する不安と矛盾の意識が渦巻いている。ここに於て、《voluptueux》なるものが、彼の人生観と結び付くことになる。

平静な快楽主義と絢爛たるイマージュの裏側で、Anatole FranceがMme de Caillavetに対して次のような手紙を書き送っているのは注目に値する。

《…Tu ne peux plus me délivrer du poison que tu as mis dans mes veines et qui me dévore.》⁷⁾

この文章に於ける《poison》という言葉は、従来、単なる言葉の綾として受け流されているが、これは彼の意識構造の特殊性に結び付いている。これが、物理性としてではなく精神性の次元を意味していることは言うまでもないが、自我の方向性と自意識の面を持っているからである。即ち、《voluptueux》なるものが、彼の人生観との精神作用によって、《poison》という実体となって、自我と自我が屈折、反射する自意識の中に浮び上ってくるからである。

Anatole Franceを惹きつけて離さないMme de Caillavetの魅力の背後に《poison》というレッシルが貼り付いていたことは、Anatole Franceの自意識の中に内部矛盾があったことを示している。何故なら、自ら求めながら、それが《poison》であることに気付いても、自らそれを退けることの出来ない面があるからである。

これを、一般的に、欲望と苦悩の葛藤として受け流すことにも、一歩の危険性がある。

先ず、道徳律の相違がある。普遍的な道徳律に於ては共通であるとしても、細かな意味合いに於ては、恋愛の状態になると通常とは異った独特の愛情律を身に付けやすい。誠実率直、慈愛、人間の尊厳が愛情の絶対性の下に服してしまいやすい。《poison》とは、恋愛を基点とした前後の道徳律の相違から生じたものである。

次に、自我の様相が係り合っている。《poison》は自我の本質的部分に喰い込んでおり、自我と自我との関連、自我の内部矛盾に結び付いている。彼の自意識の中では、欲望と苦悩は絶対的に袂をわかっているものではなく、羞恥を媒介として共存し得るものであった。

《Le désir et la pudeur se mêlent parfois en nuances délicieuses dans les

6) Jean-Levaillant: L'évolution intellectuelle d'Anatole France, Armand Colin, P. 825

7) 28 septembre 1889

âmes.》⁸⁾

この《poison》の意識は、毒物性と罪悪性を内含している。

毒物性とは、心の中で毒作用を発揮する精神的な実体の面を指す。これは、本来、愛情と快楽の追求の際の必然的所産としての《voluptueux》なるものを、《poison》たらしめることにある。人間の心の中であって、心の状態の調和と発展を憚むものである。

一般的には、人間が種々の欲望を持ち、人間の意識が相対性を持つ限りに於て、人間の意識の中に必然的に矛盾的残滓が生じることになり、これが全人間性の回復の妨げをする時、これを《poison》と呼ぶことが出来る。愛には、本来、対物的なものであれ、対人的なものであれ、意識の専一関係があり、この専一関係にあるものとなないものとの間は言うまでもなく、専一関係にあるもの同志でも、その方向と緊密さによって、人生という広場に於ける抗争を招き、そこに矛盾的残滓が生じる。Anatole France が、生々しい人生に於ける徳の位置を 次のように述べているのも、この間の事情を前提としているからである。

《Nous aborons la divine innocence, mais elle n'est pas de tous les âges et de toutes les conditions; elle n'est pas préparée à toutes les rencontres. Elle se garde des pièges de la nature et de l'homme.》⁹⁾

唯、恋愛に於ては、この残滓に特有の美意識が付加され、特有の生成因がある。Anatole Franceは、これを恋愛の本質的無辜性に帰している。

《Le mal est que l'Amour est le plus pieux des dieux. Les grecs l'ont dit. Quand il est né, il n'y avait encore ni justice ni intelligence au monde.》¹⁰⁾

前述した如く道徳律の相違からして日常性から独立しているのみならず、恋愛に於ける欲望は情熱の名を借りて絶対性を要求しがちであるから、《poison》が殆ど不可抗力的に生じる。恋愛自体は、正義や知性の面から独立しており、情熱によって一切を創造し、自律的に昇華しようとする面があり、この面が人生の多面性と関連を持つ時、種々の変化、作用をもたらすことになる。Anatole France にとって、《poison》は、恋愛の必然的所産であるのみならず、彼の快楽主義に結び付いている。自分で禁じながら求めているという危機意識が、一層、彼の快楽を増すからである。

《L'attrait du danger est au fond de toutes les grandes passions. Il n'y a pas de volupté sans vierge. Le plaisir mêlé de peur enivre.》¹¹⁾

8) Anatole France : Vie littéraire I (Oeuvres complètes illustrées d'Anatole France Tome VI), Calmann-Lévy, P. 213

9) I bid., P. 294

10) I bid., P. 40

11) Anatole France : Jardin d'Epicure, Calmann-Lévy, P. 18

次に、罪悪性とは、毒物性に対する否定精神の自意識への投影である。厳しい自己認識と自責の念に支えられているが、これが人間性の回復に作用するのは、自我のあり方如何にかかっている。この意味での《poison》の意識は、自己欺瞞と自我の分裂を前提としている。この前提に関しても、一般的なエロス、ロゴス、エトスの面だけでなく、Anatole France特有の意識の動きがある。《poison》の罪悪性は、人間の意識の中での欲望と意志との抗争が苦悩の契機をもたらすことによって生じるが、そこには価値判断が働いている。即ち、自意識の中で、毒物性に気付くとともに、何を以って罪悪とするか、何故に自責しなければいけないのか、という判断基準が必要になってくる。どこまでが罪悪で、どこまでが罪悪でないか、という罪悪の範囲、浅深の問題でもある。

彼の未刊の *Métaphysique* と *Existence de Dieu* についての対話の中で、登場人物 Floris は次のように述べている。

《Que peut-on concevoir de pur dans un univers où tout est mélange et combinaison ?

Le mot *pur* signifia d'abord ce qui est lavé. Il est dénué de tout sens, s'il en vient à qualifier un esprit, un souffle.》¹²⁾

Anatole France は、宗教的戒律や社会的道義で以って罪悪の判定をする以前に、その判定の作業の無意味さを悟っていた。彼は、人生が多面的で固定的なものではないことを知っていたし、多様の生き方のあることを理解していた。相対主義思想を持つ彼にとって外在的には、《poison》の意識は、一個の意識世界と他の意識世界との衝突の所産でもある。しかも、人生は断片ではなく連綿と続いており、彼によれば、人間は現にあるものを信じずに、これからあらうとするものを信じる性向を持っている。このような状況からすれば、罪悪の意識に関しては、一般律の深部に意識の多様性が潜んでいることになる。罪悪意識の機構的必然性と進歩的能動性に加えて、多様性が這り込む論拠を、Anatole Franceは人間の理性のあり方に置いている。

Quant à notre raison, c'est chose vague, indéfinie, incertaine, confuse, changeante, variable selon les personnes, variable dans un même individu, selon les années, les jours, les heures, qui s'allume et s'éteint tout à coup, et ne jette que trouble et contrariétés.》¹³⁾

即ち、理性は形骸的実体としては固定的であるとしても、人間の生の意識の中では、人間の内面の諸作用の影響を受けるため流動的で不安定な面があることを指摘している。厳密な意味合いに於ては、彼にとって、《poison》に於ける罪悪意識は殆んど無償の価値し

12) Michel Corday: *Dernières pages inédites*, Calmann-Lévy, P. 14

13) *Ibid.*, P. 9

か持っていないが、一般的な判断基準としては、人間主義に則っている。彼は、形骸的な意味での神や慣習の正義によってではなく、生の人間自体に即した正義に従って、罪悪を判定し、《poison》の毒物性を如何にして消去し、全人間性を実現することを目指していた。

《——Nous ne sommes que de malheureux animaux et pourtant nous sommes à nous-mêmes notre providence et nos dieux.》¹⁴⁾

Anatole France に於ける以上のような《poison》の意識は、意外に大きな意義を持っており、彼の意識構造の特殊性に基き、《poison》の意識が直截的に宗教的乃至社会的な贖罪意識に向わずに、内面的な自己分析と相対主義に向っていき、彼の文学の特質がある。

Anatole France は、人間の動物性、人生の多面をも見つめ、PaphnuceやGamelin 等の見本を創造したが、これらの作中人物も、人間の心の中に《poison》を発見する自意識の営みを前提としている。作者は、この自意識の営みから、《poison》を消去し、より良い解決を得るための過渡的道具として、これらの作中人物を設定したにすぎない。

更に、この《poison》の意識を起点として、Anatole France がどのようにして自己のユマニズムに辿り着いたかを、意識構造的に解明しておく。

彼のユマニズムの理想は、Sur la Pierre Blanche の世界と Sylvestre Bonnard の世界に象徴される。そこには、殆ど無意識で自然な快樂状態がある。彼は、思想家である以上に芸術家であり、人間の思考を心情が豊かにし、世界に善を蒔くのは感情であることを知っていた。その反面、感情が人間の諸真理を曲げてしまうことも知悉しており、人生の無常に目覚めながら、人間性を考察し、人間の自然な慈愛と人間同志の自然な契約を発見している。しかし、この世界は、極めて情緒的で且つ契約的であるが、その意識実体は茫漠としており曖昧である。Sylvestre Bonnard の愛は憐憫の一種であって、愛に於ける専一関係からくる一体感が薄く、Sur la Pierre Blanche の《Fédération européenne》の世界では契約の背後での意識の交流が脱落している。全般的に、Anatole France の作品には、愛、殊に、恋愛に於ける意識の一体感、調和感が浮き出ている面が少ない。このことは、彼の性格や創作技法上の作用があるとしても、彼の意識構造に特異な面があることに結び付いている筈である。

種々の恋愛体験をしたこの作家に、一体感調和感が無かったとは言えないが、この影を薄くせしめるような強烈な要因があることになる。

一般的に、Anatole France は、安易なエピキュリ슴と官能の倫理を謳歌している如く受け取られがちであるが、形骸的な意味での宗教的戒律や社会的慣習の枠の背後の人間主義の裏返しであり、決して本能主義に走るものではない。このことは、既に、多くの研

14) Anatole France : Histoire comique, Calmann-Lévy, P. 131

究者によって指摘されているが、Jean Levaillant は、殊に、Anatole France に於ける自意識に於ける内部矛盾とそれによって生じる不安を見透している。

この内部矛盾の起因を、理性と感情の作用を受ける欲望の面、無常觀に支えられた相對主義思想に付すことは既に試みられているが、私はこれを一つの意識世界と他の意識世界との間の空間乃至溝にも注目しておく必要があると思う。

Ⅲ

Sylvestre Bonnardと《Fédération européenne》の世界は、Anatole France にとって理想ではあるが絶対的ではなかった。何故なら、この世界の背後には、作品Thaïs に於ける Paphnuce の足搔きと作品 Les Dieux ont Soif に於ける Gamelin の狂気と作品 Mannequin d' Osier に於ける M. Bergeret の偏執が待ち受けているからである。

Paphnuce は、墮落して人心を惑わす Thaïs を善導しようとするが、彼は外面的な美の囚となってしまう、彼の心には、肉体の歡喜、嫉妬の惡意、所有の悦樂が巢くう。

Gamelinは、悲慘な人民の生活に同情と義憤を抱き激しい同胞愛に燃え革命を起し成功するが、自分が支配者になってしまうと、人民への同胞愛も消え、自己の地位を守るために人民の人間性を踏み躪る。

Mannequin d' Osierに於ける M. Bergeret は、妻と別れたくなり、自分の心の中から妻を追い出すために、①胴体模型を窓から放り出すこと、②妻と親しくしていた献身的な女中を追い出すこと、③妻自身を追い出すこととの三段階の手段を経る。

従って、Anatole France の理想世界は、夢想的性格が強く、慈愛という円の中を、恋愛その他の愛が種々の軌跡を描いており、自我と自我との葛藤、意識世界と意識世界の葛藤を前提としていることになる。

彼は愛を次のように定義付けている。

《——…L'amour est un acte simple et primitif. C'est la lutte, c'est la haine. La violence y est nécessaire. L'amour par le consentement mutuel n'est qu'une fastidieuse corvée.》¹⁵⁾

愛は、安易な妥協ではなく、戦いでもあり、憎しみでもあるということは、各人の意識世界の本質的相違性を踏まえており、愛に於ける自我と自我との絶対的合一とは相容れない自我の個有性を保持することを意味する。

この面が、愛に於ける合一性、調和性の欠如として見受けられることになる。即ち、Anatole France にとって、愛は、自我と自我との絶対的重複ではなく、自我と自我は接觸乃至一部重複しながら各々の理想に向っていることになる。

Anatole France に於ける愛、更に、自我と自我との間には、強烈な égoïsme と

15) I bid., P. 119

altruisme の葛藤が内在している。前述した三人の作中人物は、既に、作者の理想世界の住人ではなく、**égoïsme**と**altruisme**の自我の中での抗争の犠牲者である。

愛に於て、殊に、恋愛に於て、他者を愛し、他者に傾倒し、他者が苦しむことを悟っていながら、他者に求めることが、自責の念となる、これこそが《**poison**》の意識である。更に、この《**poison**》の意識は、自意識の中で **égoïsme** と **altruisme**が抗争することによって生じている。

意識世界と意識世界との間に **égoïsme** と **altruisme** が働く時、自我と自我との間の厳しい溝を欲望が往来している。更に、欲望によって動かされる**égoïsme** と **altruisme**の不調和は、各人の内面の矛盾葛藤に起因していると伴に、各人の自意識の独立性にも起因している。換言すれば、意識世界と意識世界との間の溝が深いことに目覚めていることであり、しかも、この深さを表面に出さなかった所に **Anatole France** の文学の特質がある。

彼は、この溝の深さ厳しさに目覚めていながら、それに対して一面に於て蓋をすることに、生きる知恵を見出していた。自我と自我との深淵に目覚めながら、これを **Sylvestre Bonnard** や《**Fédération européenne**》の世界に結び付けていくことの必要性とともに、人生のおぞましさに對して徒らに萎縮してしまうことの無意味さを、**Anatole France** は知っていた。

《**L'ignorance est la condition nécessaire, je ne dis pas du bonheur, mais de l'existence même. Si nous savions tout, nous ne pourrions pas supporter la vie une heure.**》¹⁶⁾

従って、彼の文学は、単純な快樂主義ではなく、意識世界と意識世界との間の深淵に支えられ、しかも、各々の意識世界は内部矛盾を持っており、それ故に苦悩した求道しているが、快活な夢想によって彼の理想世界を築いたと言える。

唯、自意識の中での**altruisme** は、**égoïsme** の作用によって規制されるものであり、この **égoïsme** は欲望の力を借りて、人生に於ける対象に向う。

彼の作品の中には、**égoïsme** は愛と価値に志向している。このため、アガペー的な愛が一定の価値を追う欲望によって損われやすい。この欲望の対象たる価値は、彼の作品に於ては、肉体、権力、美等であるが、これが **altruisme** を損う起因となっている。

作品の内面から言えば、彼の作品では愛の **égoïsme**と価値の **égoïsme** が対峙しているが、殊に、恋愛に於ては、価値の **égoïsme** は美意識によって動かされており、これが前述の溝を埋め尽そうとしているが、その溝は本質的に残存している。

伝記的にも、**Bancquart**は、**Anatole France** は情熱に動かされやすいことを次のように指摘している。

16) **Anatole France : Jardin d'Epicure, Calmann-Lévy, P.26**

《Pourtant il eut des duretés inattendues envers sa fille Suzanne, des accents de passion réelle envers madame de Caillavet;》¹⁷⁾

しかし、このことは、決して、Anatole France が Paphnuce であることを意味しない。何故ならば、Anatole France は、自我の独立性に目覚めており、自我と自我との絶対的重複を信じずに各々の自我の志向は本質的に異っていると信じており、Paphnuce, Gamelin, M. Bergeret を Sylvestre Bonnard や《Fédération européenne》に導こうとしたからである。唯、この作家は、程度の差はあっても、Paphnuce, Gamelin, M. Bergeret と同様に自分が égoïsme と altruisme との抗争に象徴される内部矛盾を持っていることを悟っていたし、これがこの作家にとって《poison》の意識となって浮び上り、これを人間共通の内部矛盾として理想郷へ近付けていったのである。

Paphnuce, Gamelin, M. Bergeret は、彼等の個人的性格の他に、人間の普遍的な内部矛盾の面を持っているが故に存在意義があり、Anatole France は、快樂主義者としてこの共通の内部矛盾に対して寛容と善意の情を注ぎ、且つ、苦惱の尊さを示した。

《Le seul grand et le seul fort (...) ,il est plein de sens et d'images; il est violent et mystérieux; il s'attache à la chair et à l'âme de la chair. Le reste n'est qu'une illusion et mensonge.》¹⁸⁾

この作家にとって、肉体と魂は《la chair》と《l'âme de la chair》であり、人間の動物性も是認し、これをも組み入れて、より高次の総和的で強靱な人間性を苦惱しながら求めていった。苦惱の営みこそ、人間の尊厳と存在意義を約束するものであった。

《Au milieu de l'éternelle illusion qui nous enveloppe, une seule chose est certain, c'est la souffrance. Elle est la pierre d'achoppement de la vie. C'est sur elle que l'humanité est fondée comme sur un roc inébranlable.》¹⁹⁾

Anatole France は、この苦惱によって、Sylvestre Bonnard と《Fédération européenne》の世界に辿り着いたが、その過程に於て明白なのは契約だけである。

形式的には、《Fédération européenne》には契約だけで充分なのかも知れないが、その背景、更に、Paphnuce, Gamelin, M. Bergeret が Sylvestre Bonnard になるための過程には、種々の懷疑主義思想が介入している。

Anatole France の文学は、その人間の内面を考える性向の故に、自我と自我の情緒的調和以上に、その内部矛盾の問題の解決の探索の色彩が濃いため、個人主義の文学とも言

17) Marie-Claire Bancquart : Anatole France, Polémiste, A. cr. Nizet, P. 9

18) Anatole France : Lys Rouge, Calmann-Lévy, P. 356

19) Anatole France : Vie littéraire I (Oeuvres complètes illustrées d'Anatole France Tome V1) , Calmann-Lévy, P. 297

える。彼にとって、個の内部矛盾が解決されなければ、全の調和などあり得ないからである。

この意味に於て、**Anatole France** の文学は、意識の技術化、イデオロギー時代のエトス化以前の人間の根源的問題を呈示している。